

雑感

内藤 莞爾



村研の大会も、今年で十回をむかえることになった。そして会場も、ふりだしに戻つて仙台で開くことになったという。早いものだ。

その成長率は、正直いつて、ついつて派手なものではなかつた。けれども日本のムラをどう捉えるか、この点での功績は、さう大きなものがあつたと思う。ことにムラを研究している人たちが、ことに史学・経済学・社会学などの人たちが、ザンク・バランに話しあう姿は、よその学会では見られない。批判もあるようだが、あのようなムードは、やはり決していきたいような気がする。会員がふえれば、そういつまでも「同志的結合」のよいなことをいつておられないかも知れない。無責任なようだが、そのときはそのときでいいのではないか。

怪くは、日本のムラをどう捉えるか、その点で村研のつくしたところが大きい、そう書いた。今までのところ、村研は大体、日本のムラに問題を集中してきた。またその日本のムラも捉えたという段階ではない。もつとも捉えてしまつたら、もうやることはない。だから、これは当然としても、怪くのいいたいのは、そのための方法的な論議を積み重ねてきた、その点の功績を認めたい、というのだ。印象的だつたのは、村落共同体の捉えかたで、はじめはどうなるか、実ははらはらしていた。むろん総合的見解に達したのではなかつた。が、共同体の規定にしても、それぞれバラバラのものでない。少くとも、おたがいの立場を尊重しあうべきだ、そんな空気がなつたのは一歩前進どころではない。大きな収穫だつた、と怪くなどは考えている。それから村研

も、そろそろ国外のムラにも手をつけていい時期ではないか。とりわけ米作りのアジア地域のムラなど、良いテーマではないか。総合研究や他の学会でも問題としているテーマではある。と同時に、この方面の研究は、実は終戦で立ち切られた。惜しいことである。日本のムラも判らないけれど、というご意見も一応もつともである。けれども、アジアのムラを理解するとき、現在のところ、日本のムラを照準点に置かざるをえないような気がする。その意味でも、われわれ同志のなかで、その方面に出發、あるいは再出發する人の出るの、自然の成長ではあるまいか。

「同志」だとか「同志的結合」だとか書いて、気のついたことだが、村研にはどだい会則のようなものがあつたかどうか。この会の誕生には、怪くも関係しているが、このことは、すつかり言われていた。申しわけないがその通りである。でも考えようによつては、「帝王、なんぞわれにあらんや」(登壇)という、治政の理想だともいえる。それから「帝王」でまた思いだしたが、村研には初会以来、白髮の老人(?)が、世話役の席に座つてござる。この老人が会長さんかどうか、その点も忘れた。十周年で表彰でもしたら、おそろしく機嫌が悪いだろうが、とにかく会の成長や団結に、この人の人望と学殖とが果したところは大きい。仙台は高校時代の古戦場とも聞いている。大会では、大いにその徳をたえようではないか。